

# 戸建住宅における子どもの発達段階による 住まい方実態に関する研究

A Study on Living Conditions according to Children's Developmental Stages in Detached Houses

古賀 蘭子\* 伊藤 圭子\*\* 定行 まり子\*\*\*  
Mayuko KOGA Keiko ITO Mariko SADAYUKI

**要約** 本研究は、戸建住宅に居住する子どもの発達段階による子ども部屋及びリビングの利用実態把握を目的に、アンケート調査および聞き取り調査を実施した。その結果を以下に記す。子ども部屋は子どもが未就学時期より用意され、4-6歳頃より玩具等で遊ぶ場として利用されることが多い。就寝は遊びより遅く、小学校高学年から本格的となる。遊びや就寝の子ども部屋利用時期は、同年代や年上のきょうだいがいる場合は早まるため、子どもが小学校低学年までは、きょうだいが同空間で就寝できる配慮が重要といえる。リビングでは、家族団らん以外の一人で行う行為が見られ、子どもの遊びや読書、勉強と親の在宅ワークを共存させるためには、オンライン会議等で使用できる静かな環境の個室空間の確保も重要である。

**キーワード**：子ども部屋、リビングルーム、きょうだい構成、年齢差、在宅ワーク

**Abstract** The purpose of this study was to ascertain how children living in detached houses use their own rooms and the living room. The results are as follows. Children are given their own rooms after preschool age, and this is often used as a place to play from around the age of 4-6. Bedtime is later than playtime, and bedtime is seriously enforced starting in the upper grades of elementary school. The timing for play and bedtime in a child's room is earlier if the child has siblings of the same age or older, so the fact that siblings can sleep in the same space until the child is in the lower grades of elementary school needs to be considered. In the living room, children's activities and parents' work from home need to coexist. To that end, a quiet private room needs to be set aside for online meetings. A private room needs to be set aside where children of middle school or high school age can study.

**Key words** : Child's room, Living room, Siblings, Age difference, Working from home

## 1. 研究の背景と目的

新築戸建て住宅を取得する世代は、3、40代が中心で、結婚や第一子の誕生等をきっかけに、購入検討が行われている。住宅計画時には、現状に対する住要求を満たす住宅の計画が中心となり、生活変化

への対応も想定するものの、実際には想定外の変化も少なくないため、住まいながら対応して行くことになる。住宅取得後には、子どもの誕生・成長・独立等の家族構成の変化や高齢化による身体機能の変化、社会情勢の変化によるライフスタイルの変化等、様々な要因による生活変化が生じる。住宅はこれら変化への対応が求められる。

そこで、本研究では建築後比較的早く現れる子どもの誕生・成長による住宅機能の変化に焦点を当て、特に子どもの発達段階によるリビングや個室での住まい方実態を把握し、子どもの発達段階に応じた利

\* 住居学科 学術研究員  
Research Fellow, Department of Housing and Architecture  
\*\* 株式会社アキュラホーム  
AQURA HOME CO.,LTD  
\*\*\*住居学科  
Department of Housing and Architecture

用変化を明らかにすることを目的とする。

発達段階による住まい方変化を把握するにあたり、本研究ではきょうだいの有無とその年代差、末子および長子の年代より分析し、子どもの発達への影響を明らかにしておく。

## 2. 調査方法

### 2-1. 調査概要

本研究では日本女子大学住居学科定行研究室と株式会社アキュラホーム<sup>1)</sup>との共同研究で行った「ライフステージによる住みこなし実態に関する研究」から得られた調査結果を元に分析を行う。

調査は株式会社アキュラホームで注文住宅を建築した世帯主もしくはその配偶者に対するアンケート調査を2021年9月から11月に、聞き取り調査を同年11月から12月に実施した。詳細をTable 1に示す。

Table 1 An overview of the survey

アンケート調査	
対象	㈱アキュラホームで注文住宅を建築し、築5年目及び築10年目の世帯主又はその配偶者2525件
方法	対象者宅へ依頼書を持参し、許可の得られた場合は、WEBアンケートを実施。WEBアンケートが不可の場合は、紙面アンケートを配布し、郵送返却。
期間	2021年9月～11月
内容	属性(回答者の性別、家族構成、就業状況、在宅ワーク状況、住宅形式等)、リビング・子ども部屋の使い方、個室の分割・統合の計画・変更の実態、住宅改善希望等
回収数	1712件(回答率67.8%)
聞き取り調査	
対象	アンケート調査にて聞き取り調査の協力承諾が得られた145名
方法	対象145名のうち、10世帯に打診し、許可の得られた4名に対し、ZOOMによるWEBインタビュー形式を実施。
期間	2021年11月22日～12月9日

### 2-2. アンケート調査回答者の概要

#### (1) 回答者世帯の概要

回答者の概要をTable 2に示す。性別は1712名中1270名74%が男性であった。年代は40代が49%と約半数を占め、30代24%、50代17%と続いた。家族人数は4人が40%と最も多く、3人23%、2人16%、5人12%が続いた。6人以上の大家族も計7%

にのぼる一方、1人の単身世帯も2%存在している。家族構成は、夫婦+子どもが59%と大多数を占め、夫婦のみ13%が続く。家族構成について、回答者の年代別にみると、Fig.1に示すとおり、30代以下および40代は夫婦+子が75%、73%と大半を占め、年代が上がると減少する。反対に、夫婦のみ世帯は50代22%、60代47%、70代以上67%と増加している。また、60代は単身が14%と、他世代とは異なる特徴が現れた。

Table 2 An overview of survey respondents

性別	n	%	年代	n	%
男	1270	74%	20代	15	1%
女	434	25%	30代	411	24%
その他	1	0%	40代	833	49%
不明	7	0%	50代	283	17%
			60代	98	6%
			70代	56	3%
			80代以上	10	1%
			不明	6	0%

家族人数	n	%	家族構成	n	%
1人	30	2%	夫婦のみ	226	13%
2人	274	16%	夫婦+子	1016	59%
3人	399	23%	夫婦+親	50	3%
4人	679	40%	夫婦+子+親	123	7%
5人	212	12%	単身	38	2%
6人	82	5%	単身+子	38	2%
7人	23	1%	単身+親	17	1%
8人以上	7	0%	その他	36	2%
不明	6	0%	不明	168	10%

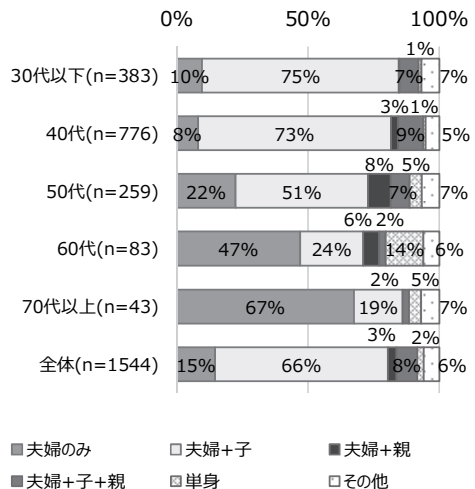


Fig. 1 Family composition of survey respondents by age

夫および妻の年代は、Fig.2 に示すとおり夫は 40 代 49%が最も多く、30 代 24%、妻も 40 代 46%、30 代 30%と続き、夫婦ともに 3,40 代が約 7 割を占めている。就業形態は、Table 3 に示すとおり夫の 84%が会社員・公務員と大多数を占め、妻はパート・アルバイト 35%、会社員・公務員 31%、無職 27%と三分した。勤務形態は夫の 90%がフルタイム勤務であり、妻はフルタイム勤務が 38%、パート勤務 21%、シフト勤務 21%と、多様な働き方であった。

同居する子どもの人数を夫の年代別に見ると、Fig.3 に示すとおり、40 代以下は 2 人が約 5 割となり、50 代になると 2 人が 31%に減少し、1 人が 38%に増加している。子どもがいない場合は、40 代以下は約 1 割である一方で、50 代は 24%、60 代以上は約 5 割と年代が進むにつれて増加している。

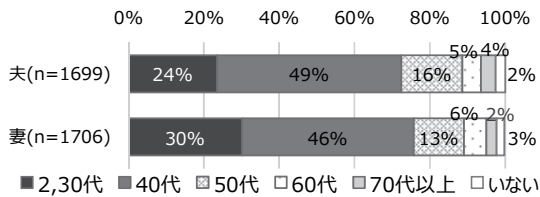


Fig. 2 Age of husbands and wives

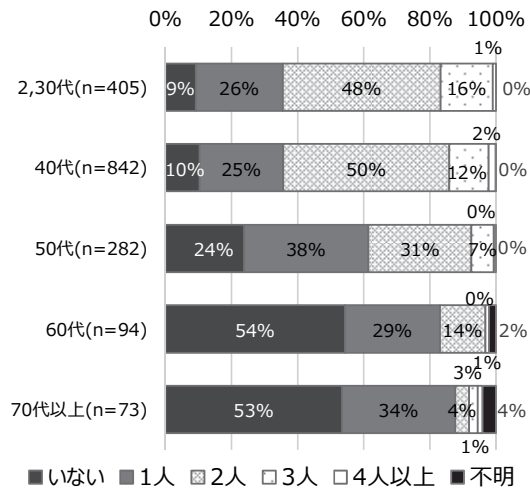


Fig. 3 Number of children by the husband's age

Table 3 Employment status of husbands and wives

属性	夫	妻	属性	夫	妻
n	1703	1703	n	1564	1207
会社員・公務員	84%	31%	フルタイム勤務	90%	38%
パート・アルバイト	2%	35%	シフト勤務	5%	21%
自営業・自由業	6%	4%	時短勤務	1%	5%
内職	0%	0%	パート勤務	2%	31%
学生	0%	0%	その他	2%	4%
無職	5%	27%			
いない	0%	1%			
その他	3%	2%			

夫の年代別に末子および長子の学齢を Table 4 に示す。30 代以下は末子が未就学児 1-3 歳及び未就学児 4-6 歳が中心であり、長子は未就学児 4-6 歳から小学 4-6 年生が中心となっている。40 代となると末子が小学 1-3 年生と小学 4-6 年生が中心で、長子が小学 4-6 年生と中学生が中心となる。50 代になると末子の学齢は妻が 40 代以上の子どもがいないが最も多くなる一方で、子どもの学齢は小学 1-3 年生から社会人以上と年代幅が広くなり、長子は中学生以降に分布している。60 代および 70 代は末子も長子も社会人以上が約 4 割、妻が 40 代以上の子どもがいない世帯が約 4-5 割と、成長段階の子どもがいない世帯となっている。

兄弟姉妹のいる場合の末子と長子の学齢差を、Table 5 に示す。末子と長子の学齢差は全体で 5 歳未満が 74%と多い一方で、5-9 歳程度離れている場合も 24%にのぼる。10 歳以上離れている場合も 2%確認された。

## (2) 回答世帯の住宅概要

回答世帯の住宅概要を Table 6 に示す。居住地は南関東が 67%と半数以上をしめ、東海、近畿、中国が約 1 割ずつである。

住宅形式は専用住宅が 98%と大半であり、賃貸併用住宅、事務居併用住宅、店舗併用住宅も 1%ずつである。階数は 2 階建てが 91%と主流で、1 階建て、3 階建て以上も 5%ずつである。建築年数は 5 年前及び 10 年前が約 5 割ずつである。

玄関個数とキッチン個数の関係は、Fig.4 に示すとおり、キッチン 1 つの場合は玄関 1 つの住宅が 99%と大多数を占め、キッチン 2 つの場合は玄関 1 つが 62%と最も多く、玄関 2 つも 38%にのぼり、全体の約 1 割は二世帯住宅であると予想される。

Table 4 The youngest child's age by the husband's age

末子学齢	夫の年代※					長子学齢	夫の年代※				
	~30代 (n=405)	40代 (n=841)	50代 (n=281)	60代 (n=92)	70代~ (n=70)		~30代 (n=405)	40代 (n=842)	50代 (n=282)	60代 (n=94)	70代~ (n=73)
子なし(妻-30代)	8%	1%	0%	0%	0%	子なし(妻-30代)	8%	1%	0%	0%	
未就0歳	6%	1%	1%	0%	0%	未就0歳	1%	0%	0%	0%	
未就1-3歳	29%	7%	2%	0%	0%	未就1-3歳	10%	3%	1%	1%	
未就4-6歳	23%	11%	2%	0%	0%	未就4-6歳	20%	4%	2%	4%	
小1-3	17%	20%	3%	0%	0%	小1-3	29%	11%	1%	0%	
小4-6	11%	21%	11%	0%	0%	小4-6	20%	22%	6%	0%	
中学	4%	15%	12%	0%	0%	中学	9%	20%	12%	0%	
高校	0%	8%	13%	0%	0%	高校	2%	17%	15%	0%	
大学	0%	4%	14%	7%	1%	大学	0%	9%	13%	2%	
社会人以上	0%	3%	18%	38%	43%	社会人以上	0%	4%	26%	41%	
子なし(妻40代-)	1%	9%	24%	55%	56%	子なし(妻40代-)	1%	9%	24%	49%	
不明	0%	0%	0%	2%	4%	不明	0%	0%	0%	2%	

※夫がいない場合は妻の年代

※夫がいない場合は妻の年代

Table 5 Age of youngest and first child, if siblings

学齢	末子学齢(人)								計	末子と長子年代差			
	未就0歳	未就1-3歳	未就4-6歳	小1-3	小4-6	中学	高校	大学		社会人以上	5歳未満	5-9歳程度	10歳以上
長子学齢(人)	未就0歳	2								2	100%	0%	0%
	未就1-3歳	7	12							19	100%	0%	0%
	未就4-6歳	11	58	10						79	100%	0%	0%
	小1-3	8	42	82	26					158	68%	32%	0%
	小4-6	1	19	40	117	42				219	73%	27%	0%
	中学	1	1	12	24	110	28			176	78%	20%	1%
	高校	1	1	4	15	29	68	20		138	64%	32%	4%
	大学		1	1	2	9	10	31	14	68	66%	28%	6%
社会人以上		1		1	3	5	7	19	36	72	76%	17%	7%
計	31	135	149	185	193	111	58	33	36	931	74%	24%	2%

Table 6 An overview of detached houses

居住地	n	%	住宅形式	n	%
北関東	66	4%	専用住宅	1674	98%
南関東	1144	67%	賃貸併用住宅	10	1%
甲信	1	0%	事務所併用住宅	13	1%
東海	164	10%	店舗併用住宅	13	1%
近畿	209	12%	不明	2	0%
中国	119	7%			
不明	9	1%			

階数	n	%	建築年	n	%
1階建て	82	5%	5年前	849	50%
2階建て	1550	91%	10年前	831	49%
3階建て以上	79	5%	わからない	26	2%

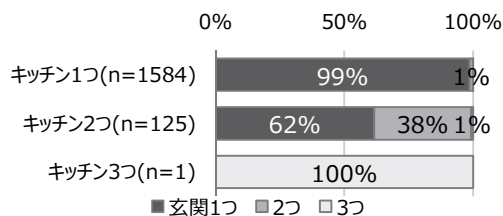


Fig. 4 Relationship between the number of entrances and the number of kitchens

個室数とキッチン個数の関係は、Fig.5 に示す通り、キッチン1つの場合は、個室3つと4つが約35%ずつと中心で、キッチン2つの場合は複数の世帯が居住していると予想されることから、個室が5つ以上が55%と最も多く、個人それぞれのプライベートスペースが確保されていると考えられる。

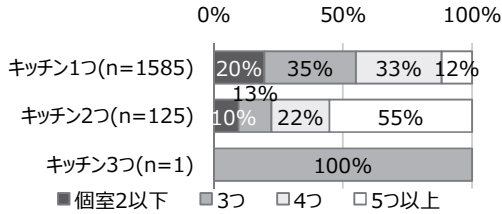


Fig. 5 Relationship between the number of private rooms and the number of kitchens

### 2-3. 聞き取り調査回答者の概要

聞き取り調査回答者の詳細を Table 7 に示す。回答者は男性 3 名、女性 1 名で年代は 30 代 1 名、40 代 2 名、60 代 1 名であった。入居年は 2016 年が 3 名、2011 年が 1 名であった。

Table 7 Outline of interview respondents

事例	A	B	C	D
回答者	夫64歳	夫38歳	夫44歳	妻41歳
同居家族	妻61歳	妻40歳 長男10歳 次男8歳	妻43歳 長女12歳 次女9歳 長男3歳	夫50歳 母69歳
入居年	2016年	2016年	2011年	2016年
現在退去の入居時同居家族	次男32歳 三男29歳	—	—	父 祖母
住宅概要	2階建て 4LDK	平屋建て 4LDK	3階建て 2LDK	3階建て 1DK+4LDK

## 3. 子ども部屋の使い方

### 3-1. 子ども部屋の有無

全対象世帯のうち、78%は子ども部屋を有しており、うち85%が子ども部屋を利用している。子ども部屋の有無と利用状況を長子の年代別にみると、Fig.6のとおり、未就学児1-6歳では、子ども部屋の利用は5-6割にとどまり、小学生は約8割に増加する。中学生になると約9割まで上昇し、一人になれる個室空間のニーズが高まるといえる。

未就学児で、個室を利用していない世帯においても、個室は用意している世帯は約3-4割にのぼり、今後必要となると予想される個室が用意されている。聞き取り調査においても、事例Cは子ども部屋として用意している個室はまだ、子ども専用の個室として使用されておらず、12歳、9歳、3歳の子どまと40代の妻が就寝に使用している。ただし、別の個室は12歳の長女の勉強部屋兼40代夫の寝室として使用されており、利用時間によってフレキシブルな

個室利用がされている。

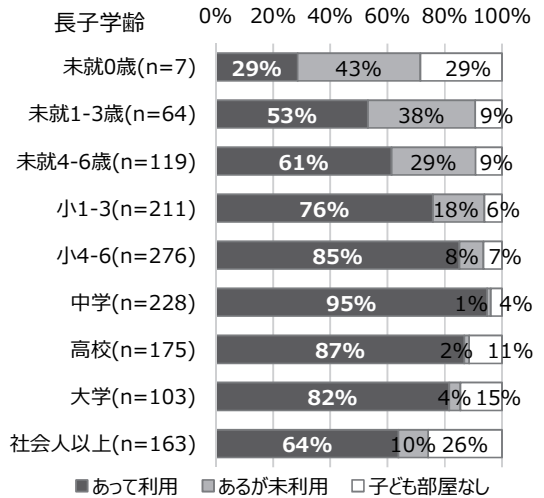


Fig. 6 Existence or lack of a child's room and its use

### 3-2. 個室分割および統合状況

分割や統合が可能な個室とした割合は、Fig.6に示すとおり、合計で31%であり、分割できる個室は21%、統合できる個室は7%、分割も統合もできる個室は3%であった。

現在の分割状況を長子学齢別にみると、Fig.8に示すとおり、未就学児4-6歳の約2割が壁や家具等で部屋の分割を行っており、小学校4-6年生になると約3割、中学生になると約5割、大学生では55%と、学齢が進むにつれて、分割実施率が進む。

聞き取り調査においても、事例Cは「小学校低学年の時は親の目のあるリビングで勉強をさせ、高学年になったら、個室で勉強したり遊べたらよいと思う」と、きょうだいがいる場合でも子どもが勉強に集中できる個室空間が、小学4-6年生から求められているといえる。

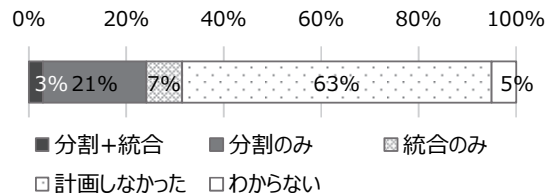


Fig. 7 Plans to divided or consolidate private rooms

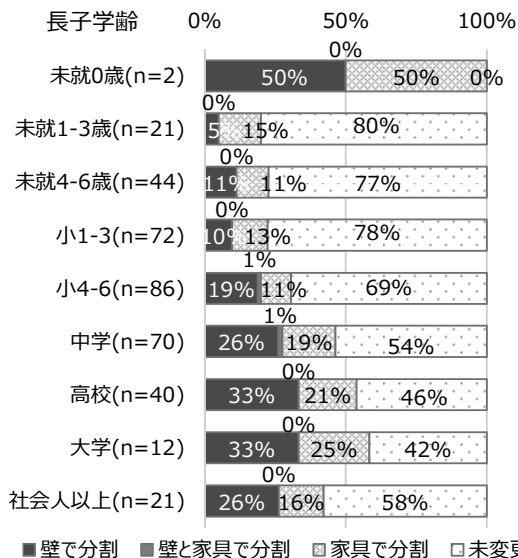


Fig. 8 Division of private rooms

個室分割方法は小学校 1-3 年生までは壁分割と家具分割が半数ずつであるが、小学校 4-6 年生以上は壁分割率が約 6 割に上昇し、家具分割より実施割合が高くなる。小学 4-6 年生以上は、勉強に集中できる空間として、家族の音が気にならないことも重要な要件であり、家具分割が高まると考えられる。

### 3-3. きょうだい構成と子ども部屋利用の関係

子ども部屋での実施する行為を table 8 に示す。きょうだいがいない場合、子ども部屋の利用が始まる時期は未就学児 4-6 歳で、玩具やゲーム等で 41% が利用している。玩具やゲーム等の利用は小学 4-6 年生までに多く、中学生からはスマホ操作 51% および勉強 55% が多くなる。就寝時期については、個室利用が始まる未就学児 4-6 歳は 22% と高くなく、小学 1-3 年生 40%、小学 4-6 年生 63% と、小学校高学年から、本格的な利用がみられるといえる。

きょうだいによる子ども部屋利用時期の影響をみると、就寝は同年代のきょうだいがいる場合は、いない場合より早い時期から子ども部屋が利用され、小学 1-3 年生で 54% にのぼる。5 歳以上年上のきょうだいがいる場合も、未就学児 4-6 歳でも就寝に子ども部屋利用する割合が 31% と、きょうだいがいない場合より利用割合が高い。反対に、5 歳程度年下のきょうだいがいる場合は、就寝時期が遅くなり、小学 1-3 年生でも 26% の利用にとどまる。就寝によ

Table 8 What children do in their own room

行為	子の学齢	きょうだいの有<きょうだいの年代>				全体			
		5-9 歳下	5-9 歳上	同年代	5-9 歳上				
就寝 ・ 就寝 ・ 就寝	未就学児(0-3歳)	13%	—	—	19%	10%	14%	13%	
	未就学児(4-6歳)	22%	—	—	13%	10%	14%	31%	
	小学生(1-3年)	40%	30%	26%	54%	38%	38%	36%	
	小学生(4-6年)	63%	59%	51%	<b>74%</b>	60%	66%	60%	
	中学生	64%	<b>74%</b>	60%	67%	<b>71%</b>	<b>86%</b>	67%	
	大・短・専門生	62%	<b>74%</b>	65%	42%	68%	—	64%	
	社会人以上	45%	<b>73%</b>	<b>74%</b>	60%	—	—	52%	
	玩具・ゲーム遊び	未就学児(0-3歳)	17%	—	—	29%	33%	30%	27%
	未就学児(4-6歳)	41%	—	—	45%	30%	41%	33%	39%
	小学生(1-3年)	46%	54%	51%	46%	43%	44%	47%	
小学生(4-6年)	42%	51%	50%	43%	51%	47%	48%		
中学生	30%	39%	36%	36%	23%	27%	36%		
大・短・専門生	14%	37%	13%	25%	32%	—	21%		
社会人以上	13%	36%	26%	34%	—	—	19%		
テレビ視聴	未就学児(0-3歳)	0%	—	—	0%	1%	7%	3%	
未就学児(4-6歳)	6%	—	—	1%	10%	6%	4%	4%	
小学生(1-3年)	6%	14%	7%	4%	10%	3%	8%		
小学生(4-6年)	11%	10%	9%	17%	5%	0%	9%		
中学生	18%	10%	8%	11%	10%	5%	12%		
大・短・専門生	36%	11%	16%	33%	21%	—	26%		
社会人以上	21%	36%	37%	34%	—	—	26%		
本・雑誌	未就学児(0-3歳)	13%	—	—	5%	13%	13%	12%	
	未就学児(4-6歳)	15%	—	—	14%	10%	17%	21%	
	小学生(1-3年)	20%	24%	25%	31%	26%	21%	24%	
	小学生(4-6年)	24%	36%	34%	26%	31%	32%	31%	
	中学生	27%	35%	33%	30%	19%	33%	30%	
	大・短・専門生	26%	42%	26%	42%	16%	—	29%	
社会人以上	18%	45%	26%	31%	—	—	23%		
スマホ操作	未就学児(0-3歳)	3%	—	—	5%	1%	3%	3%	
	未就学児(4-6歳)	2%	—	—	6%	0%	2%	4%	
	小学生(1-3年)	12%	6%	10%	8%	11%	10%	10%	
	小学生(4-6年)	25%	31%	18%	21%	28%	26%	24%	
	中学生	51%	53%	40%	50%	65%	<b>81%</b>	51%	
	大・短・専門生	52%	<b>74%</b>	58%	42%	53%	—	55%	
社会人以上	35%	<b>73%</b>	58%	43%	—	—	41%		
仕事・勉強	未就学児(0-3歳)	2%	—	—	5%	0%	0%	1%	
	未就学児(4-6歳)	2%	—	—	4%	0%	0%	3%	
	小学生(1-3年)	17%	22%	19%	35%	21%	18%	21%	
	小学生(4-6年)	39%	51%	36%	36%	39%	53%	41%	
	中学生	55%	65%	59%	47%	55%	<b>81%</b>	57%	
	大・短・専門生	34%	<b>74%</b>	52%	42%	47%	—	47%	
社会人以上	19%	27%	37%	31%	—	—	24%		
授業・会議	未就学児(0-3歳)	0%	—	—	0%	0%	1%	0%	
	未就学児(4-6歳)	0%	—	—	1%	0%	2%	1%	
	小学生(1-3年)	2%	8%	9%	0%	5%	3%	5%	
	小学生(4-6年)	8%	15%	7%	12%	11%	8%	10%	
	中学生	20%	28%	11%	23%	19%	43%	21%	
	大・短・専門生	17%	42%	45%	42%	37%	—	32%	
社会人以上	3%	9%	11%	9%	—	—	5%		
音楽・弾く・聴く	未就学児(0-3歳)	0%	—	—	0%	1%	0%	0%	
	未就学児(4-6歳)	4%	—	—	3%	0%	1%	4%	
	小学生(1-3年)	7%	4%	4%	0%	7%	10%	6%	
	小学生(4-6年)	7%	12%	8%	12%	6%	13%	9%	
	中学生	18%	29%	20%	21%	26%	38%	23%	
	大・短・専門生	10%	21%	35%	33%	26%	—	22%	
社会人以上	6%	55%	32%	20%	—	—	14%		
運動・体操	未就学児(0-3歳)	5%	—	—	0%	3%	6%	4%	
	未就学児(4-6歳)	7%	—	—	0%	1%	8%	5%	
	小学生(1-3年)	7%	12%	2%	4%	9%	13%	8%	
	小学生(4-6年)	2%	10%	8%	5%	2%	5%	5%	
	中学生	9%	8%	5%	8%	6%	14%	8%	
	大・短・専門生	3%	16%	10%	25%	0%	—	9%	
社会人以上	2%	0%	11%	11%	—	—	4%		



子ども部屋利用は、同年代および年上のきょうだいがいる場合は、利用学齢が早まり、年下のきょうだいがいる場合は、利用学齢が遅くなるといえる。

玩具・ゲーム等の遊びについては、未就学児 0-3 歳でも同年代および年上のきょうだいがいる場合は子ども部屋利用する割合が約 3 割と高くなる。

スマホ操作は、5 歳以上年上のいる中高生の子どもの部屋利用が 81% ときょうだいがいない場合より高く、また 5 歳以上年下のきょうだいがいる大学生以上も 74% と高くなり、プライベートな空間での利用ニーズが高いといえる。勉強についても 5 歳以上年上のいる中高生の子どもの部屋利用が 81% ときょうだいがいない場合より高く、また 5 歳以上年下のきょうだいがいる小学 4-6 年生 51%、中高生 65%、大学生等 74% ときょうだいがいない場合より子ども利用割合が高い。スマホ操作や勉強は、年下のきょうだいがいる場合、他のきょうだいの影響を受けにくい個室での利用が望まれているといえる。同様に、授

業での子ども部屋利用も、大学生等はきょうだいがいない場合に比べ、きょうだいがいる場合は全般的に子ども部屋利用が多い。勉強や授業といった個人で集中を要する行為は、学齢があがるにつれて、きょうだいや家族の影響を受けにくい個室が必要になるといえる。

#### 4. リビングでの家族の行為

##### 4-1. 実施率の高い行為

リビングで家族のいずれかが行っている行為を Table 9 に示す。末子学齢、長子学齢共にいずれの学齢も高い行為は「テレビを見る」、「スマートフォン等の操作」である。実施する世帯が多くはないものの、「新聞・雑誌を読む」「ゲームをする」「昼寝をする」は約半数の世帯が実施している行為であり、リビングでは家族が団らんするだけでなく、空間を共有しながらも一人で行う行為を行っているといえる。

Table 9 What the family does in the living room

家族のリビングでの生活行為	末子学齢										全体 (n=1662)	
	子なし(妻-30代) (n=41)	未就0歳 (n=36)	未就1-3歳 (n=175)	未就4-6歳 (n=186)	小1-3 (n=234)	小4-6 (n=248)	中学 (n=168)	高校 (n=108)	大学 (n=75)	社会人以上 (n=140)		子なし(妻40代-) (n=238)
テレビを見る	85%	92%	87%	86%	82%	82%	79%	78%	67%	91%	90%	84%
おもちゃ等で遊ぶ	12%	86%	86%	74%	57%	23%	14%	6%	5%	8%	8%	35%
ゲームをする	44%	56%	53%	68%	72%	56%	44%	30%	23%	19%	21%	46%
スマートフォン等の操作	80%	86%	75%	83%	77%	69%	75%	65%	59%	55%	59%	70%
絵本・本を読む	34%	69%	68%	59%	55%	32%	27%	24%	24%	25%	27%	40%
新聞・雑誌を読む	49%	33%	41%	42%	55%	49%	51%	52%	60%	57%	60%	51%
仕事をする	24%	39%	32%	31%	31%	27%	24%	24%	28%	21%	22%	27%
勉強する	12%	44%	48%	59%	67%	53%	38%	25%	32%	5%	8%	39%
授業を受ける	0%	6%	7%	9%	14%	13%	8%	7%	4%	1%	0%	7%
昼寝をする	44%	61%	53%	57%	50%	44%	40%	44%	35%	36%	45%	46%
楽器を弾く	10%	8%	15%	18%	15%	11%	10%	3%	3%	6%	7%	11%
音楽を聴く	34%	44%	36%	35%	38%	29%	33%	24%	29%	26%	27%	32%
運動・体操する	20%	53%	34%	38%	44%	30%	23%	20%	13%	14%	23%	29%
家族のリビングでの生活行為	長子学齢										全体 (n=1662)	
	子なし(妻-30代) (n=41)	未就0歳 (n=8)	未就1-3歳 (n=62)	未就4-6歳 (n=116)	小1-3 (n=211)	小4-6 (n=273)	中学 (n=228)	高校 (n=188)	大学 (n=108)	社会人以上 (n=176)		子なし(妻40代-) (n=238)
テレビを見る	85%	88%	81%	83%	89%	82%	82%	80%	75%	88%	90%	84%
おもちゃ等で遊ぶ	12%	63%	77%	79%	77%	44%	29%	16%	13%	10%	8%	35%
ゲームをする	44%	25%	39%	45%	74%	61%	57%	45%	38%	24%	21%	46%
スマートフォン等の操作	80%	88%	76%	73%	78%	71%	76%	74%	66%	59%	59%	70%
絵本・本を読む	34%	63%	73%	62%	58%	47%	36%	30%	28%	27%	27%	40%
新聞・雑誌を読む	49%	63%	47%	34%	44%	51%	50%	48%	59%	59%	60%	51%
仕事をする	24%	50%	26%	33%	33%	29%	26%	24%	32%	22%	22%	27%
勉強する	12%	38%	26%	34%	70%	55%	53%	39%	43%	13%	8%	39%
授業を受ける	0%	0%	0%	2%	14%	11%	11%	8%	14%	2%	0%	7%
昼寝をする	44%	50%	50%	53%	55%	42%	48%	46%	40%	39%	45%	46%
楽器を弾く	10%	0%	11%	13%	16%	14%	11%	10%	5%	6%	7%	11%
音楽を聴く	34%	38%	34%	33%	36%	32%	34%	32%	28%	28%	27%	32%
運動・体操する	20%	25%	24%	36%	38%	34%	36%	24%	21%	18%	23%	29%

4-2. 子どもが実施する行為

リビングという家族の共用空間において、子どもが行う行為についてみると、「おもちゃ等で遊ぶ」は末子学齢で未就学児6歳以下が8割前後と多く、小学1-3年生は57%に減少している。一方長子学齢では、小学1-3年生まではリビングで「おもちゃ等で遊ぶ」が約8割と、小学1-3年生は年下のきょうだいがいる方が遊び場として使用され、きょうだい関係によって行為に差が生じている。

「絵本・本を読む」については、大人も実施している可能性があるが、末子学齢では小学1-3年生までが6-7割にのぼり、小学4-6年生で32%に急減していることに対し、長子学齢では小学4-6年生も47%と、末子学齢ほどの減少率ではない。小学4-6年生は年下のきょうだいがいる方が、リビングは「絵本・本を読む」環境になりやすいといえる。

「勉強する」については、末子学齢では小学1-3年生をピークに、未就学児0歳から小学4-6年生に多い。長子学齢でも、末子学齢同様に小学1-3年生がピークとなり、中学生53%、高校生39%、大学生43%と学齢があがっても、リビング学習派が一定数確認された。リビングは学齢の低いきょうだいがいるほど、「勉強する」環境でありつづけるといえる。

「運動・体操をする」については、末子学齢が未就学児1-3歳で34%である一方、長子学齢では未就学児1-3歳は24%と少なく、年上のきょうだいがいる場合の方がリビングは運動する場として利用されていると考えられる。

4-3. 夫および妻の在宅ワーク状況

(1) 在宅ワーク実施状況

家族がリビングで行うことのうち、「仕事」は全体で約3割にのぼっている。夫および妻の在宅ワーク実施状況は、Table 10 に示すとおり、夫は約3-5割、妻は2-4割強と、夫の在宅ワーク率が高い傾向にあった。末子の学齢による差は見られなかった。

(2) 在宅ワーク場所

在宅ワーク場所はTable 11 に示すとおり、全体では夫は書斎等の個室35%、ダイニングテーブル34%と、場所が二分されており、妻はダイニングテーブルが53%と最も高い。妻がダイニングテーブルで在宅ワークをする傾向は子ども未就学児4-6歳が73%と最も多く、小学1-3年生67%、未就学児62%と続く。子どものリビングでの勉強や遊びを行う時期と

Table 10 Extent to which husbands and wives are working from home

末子学齢	夫 在宅ワーク		妻 在宅ワーク			
	N	している	していない	N	している	していない
子なし(妻-30代)	32	34%	66%	23	26%	74%
未就0歳	32	44%	56%	15	27%	73%
未就1-3歳	110	37%	63%	74	36%	64%
未就4-6歳	113	39%	61%	87	29%	71%
小1-3	151	41%	59%	114	29%	71%
小4-6	167	41%	59%	122	26%	74%
中学	106	44%	56%	82	30%	70%
高校	77	31%	69%	54	28%	72%
大学	41	46%	54%	32	44%	56%
社会人以上	65	25%	75%	47	23%	77%
子なし(妻40代-)	123	42%	58%	99	37%	63%
不明	5	60%	40%	5	60%	40%
全体	1022	39%	61%	754	31%	69%

重なることから、妻は子どもを見守りながら、在宅ワークを実施していると予想される。

子どもを見守りながら行うことのできる業務内容と難しい業務内容が存在するが、どのような状況時に場所移動するかについては、Fig.9 に示すとおり、夫も妻も在宅ワーク場所がリビング等の共用室および個室の両方がある場合は移動する割合が高くなる。特に、家庭内で発生する音が支障のあるオンライン会議時での移動が高くなる。特に妻の移動割合が57%と夫45%に比べて高く、共用室では子どもの様子を見ながら在宅ワークを行い、会議時には必要に迫られて移動していると考えられる。移動状況を末子の学齢別にみると、Table 12 に示すとおり、夫は未就学児0歳から小学6年生の間で半数が移動していることが多い。子どもの学齢が小学生まではリビングでの親の在宅ワークとの共存が難しく、静かな環境で在宅ワークが可能な個室空間が必要とされているといえる。

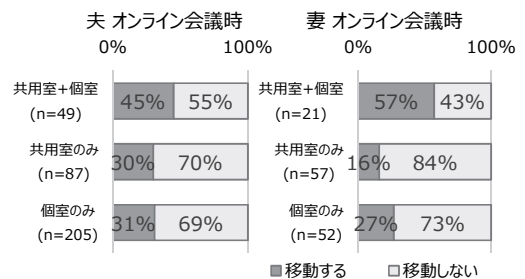


Fig. 9 Changes in location when husbands and wives work from home



Table 11 Location where husbands and wives work at home

夫の在宅ワーク場所	子なし	未就	未就	未就	小1-3	小4-6	中学	高校	大学	社会人	子なし	全体
	妻-30代 (n=14)	0歳 (n=15)	1-3歳 (n=44)	4-6歳 (n=40)	(n=57)	(n=61)	(n=36)	(n=22)	(n=16)	以上 (n=16)	妻40代- (n=34)	(n=358)
ダイニングテーブル	21%	47%	45%	38%	40%	39%	17%	36%	13%	31%	29%	34%
ダイニングやリビングの一角	0%	13%	7%	10%	7%	3%	6%	9%	6%	6%	3%	6%
リビング・ダイニングと接続する個室	14%	13%	9%	0%	11%	13%	11%	0%	25%	19%	18%	11%
書斎、仕事専用の個室	36%	47%	39%	45%	32%	36%	28%	27%	31%	31%	32%	35%
寝室の一角・自室等の個室	36%	33%	23%	20%	18%	15%	39%	36%	38%	19%	24%	24%
客間・応接室を仕事用に設えた個室	0%	0%	2%	0%	7%	2%	3%	0%	13%	0%	9%	3%
その他	0%	0%	2%	8%	7%	7%	8%	0%	6%	6%	0%	5%
妻の在宅ワーク場所	子なし	未就	未就	未就	小1-3	小4-6	中学	高校	大学	社会人	子なし	全体
	妻-30代 (n=5)	0歳 (n=4)	1-3歳 (n=21)	4-6歳 (n=15)	(n=18)	(n=22)	(n=16)	(n=10)	(n=5)	以上 (n=4)	妻40代- (n=15)	(n=137)
ダイニングテーブル	20%	50%	62%	73%	67%	55%	44%	50%	20%	75%	33%	53%
ダイニングやリビングの一角	0%	0%	10%	27%	22%	9%	13%	10%	0%	0%	7%	12%
リビング・ダイニングと接続する個室	20%	0%	10%	20%	6%	23%	13%	30%	20%	25%	7%	15%
書斎、仕事専用の個室	20%	50%	19%	20%	22%	18%	50%	0%	60%	25%	27%	25%
寝室の一角・自室等の個室	0%	0%	19%	33%	6%	14%	0%	40%	60%	25%	27%	18%
客間・応接室を仕事用に設えた個室	0%	0%	0%	13%	0%	5%	6%	0%	0%	0%	7%	4%
その他	20%	0%	0%	7%	11%	0%	13%	0%	0%	0%	7%	6%

Table 12 Changes in location when working from home by the youngest child's age

末子学齢	オンライン会議時の移動					
	夫/共用室+個室			妻/共用室+個室		
	しない	する	計	しない	する	計
子なし(妻-30代)	0	1	1	0	0	0
未就0歳	2	2	4	0	0	0
未就1-3歳	4	3	7	1	0	1
未就4-6歳	4	1	5	3	3	6
小1-3	5	4	9	1	1	2
小4-6	5	3	8	1	1	2
中学	1	3	4	0	3	3
高校	0	2	2	1	1	2
大学	0	2	2	0	1	1
社会人以上	2	0	2	1	1	2
子なし(妻40代-)	4	1	5	1	1	2
全体	27	22	49	9	12	21

### 5. まとめ

本研究では、子どもの発達段階によるリビングや個室での住まい方実態から、子どもの発達段階に応じた利用変化を明らかにした。

子ども部屋は子どもが未就学時期より用意され、発達段階に応じて、用途を限定して使用されている。

子ども部屋の利用用途および利用時期は、玩具等で遊ぶ場として未就学児 4-6 歳より利用されることが多く、就寝は小学校高学年から、利用が本格的に

なる。

利用時期はきょうだい構成により異なり、同年代や年上のきょうだいがいる場合は、就寝や遊びによる利用時期が早まり、年下のきょうだいがいる場合は遅くなる傾向が明らかとなった。子ども部屋は子どもの自立の始まりである一人就寝を実現する場といえ、きょうだい構成による影響も大きいことから、子どもが小学校低学年までは、きょうだいが同空間で就寝できる配慮が重要といえる。

子ども部屋でのスマホ操作や勉強は、中高生や大学生にとって、他の家族の影響を受けにくい個室での利用が望まれている。子ども部屋を一つの空間から壁や家具などで仕切る行為は中高生以上で高まることから、中学生から空間的プライバシーの確保が大切であると考えられる。

リビングにおいても、家族団らん以外の一人で行う行為が見られ、家族が同空間にいながらも、それぞれに一人時間を楽しむことができる空間が必要とされている。子どもはリビングで、遊びや読書、勉強を行う割合が高く、年下のきょうだいがいる方が利用割合が高い。一方、親は在宅ワークを実施しており、特に妻のダイニング空間での利用が高い傾向にある。しかしながら、子どもの学齢が小学生まではリビングでの親の在宅ワークとの共存が難しく、オンライン会議等で使用できる静かな環境の個室空

間の確保も重要といえる。

### 謝辞

本稿の調査においては、調査対象者の皆様に多大なご協力を賜りました。記して謝意を申し上げます。

### <注>

- 1) 株式会社アキュラホームは完全自由設計の注文住宅の建設を主たる事業としているハウズビル

ダーで、2014年6月に住生活研究所を設立し、以来、さまざまな分野の専門家とともに住まいと暮らしの研究を行い、世代を超えて長く快適に暮らしていける豊かな住環境の実現をめざしている。

### <参考文献>

国土交通省住宅局「令和三年度住宅市場動向調査報告書」